

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：32607

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10252

研究課題名（和文）臨床看護師に対する看護研究支援システムの開発と有効性の評価に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Development and Evaluation of the Effectiveness of a Nursing Research Support System for Clinical Nurses

研究代表者

中山 栄純（Nakayama, Eijunn）

北里大学・看護学部・准教授

研究者番号：70326081

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：看護師の看護研究の実施を支援するための自己学習支援システムを開発し、自由に使ってもらった。その後、システムの有効性について評価した。公開とともに利用回数や理解度に対する自己評価得点は向上し、研究の学会などでの発表会数も増加した。また、システム導入後、研究を最後まで実施できた者の割合や研究成果の発表数の増加にもつながったことから、本システムの有効性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

臨床での看護研究の実施は困難で、年に数回の研修のみではやり遂げることは難しい場合も少なくない。そのような中で、研究に取り組む看護師の主体的な取り組みを少なからず支援できる可能性を示せたことは社会的にも意味があると考えられる。研究途中での新型コロナウイルス感染のアウトブレイクは予想外であったが、そのことでICTを活用した本システムの有効性はより強化され、対面などの研修が制限された場合にも、その支援を継続していける可能性を示すことができたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：A self-study support system to assist nurses in conducting nursing research was developed and given free use. The effectiveness of the system was then evaluated. Along with the release of the system, the number of times the system was used and the self-evaluation score of understanding of one's own efforts, and the number of presentations of the research at conferences increased. The system also led to an increase in the proportion of those who were able to carry out their research to the end and in the number of presentations of their research results. These results suggest the effectiveness of this system.

研究分野：基礎看護学、看護教育学

キーワード：看護研究 支援システム ICT

1. 研究開始当初の背景

臨床看護師が看護研究に取り組むことは、科学的な看護実践、看護の質の向上、スタッフの問題解決力の養成には必要不可欠である。また、看護研究の重要性は、日本看護協会の看護職の倫理綱領でも「第11条 看護師は、研究者や実践を通して、専門的知識や・技術の創造と開発に努め、看護学の発展に寄与する。」と明記されている。実際、多くの病院で看護研究は実施されている。しかし、その一方で、看護研究を実施する臨床看護師は、その実施プロセスで「研究テーマの設定が難しい」「文献検討が不十分」「看護研究のプロセスが分からない」「研究計画の立案が難しい」「研究成果のまとめ方が難しい」の課題を抱え、「研究時間の不足」「研究支援体制の不足」「研究に対する能力、知識の不足」など環境面での実施困難さも感じていることがいくつかの先行研究でも報告されている。このような中、看護研究の支援方法のあり方などに関する先行文献はいくつか見られるが、各自が自由な時間に活用できる ICT を活用した臨床研究に対する支援システムの有効性について検討した研究は見当たらない。

2. 研究の目的

以前の科学研究費補助金で開発し一定の成果を確認した看護学生向けの「自己学習支援システム」を臨床看護師向けの看護研究支援システムに応用し、その有効性を評価することである。

本システムを臨床看護師に自由に使用してもらうことで看護研究に対する主体的な取り組みの促進や研究自体の質向上に影響及ぼす要因が明らかになる。また、このシステムを有効活用してもらいながら、改善のサイクルを回していくことで、より一層、望ましいシステムへと発展していくことが期待される。また、システムはオープンリソースである LMS (Learning Management System) である Moodle やポートフォリオシステムである Mahara をベースとして作成しているため、比較的自由に改良や改善を進められるメリットがある。

3. 研究の方法

1) 看護技術教育の担当者、教育学の研究者、ICT の研究者、病院の看護部教育担当者(看護研究支援者、看護研究体験者)の定期的な討議により、臨床看護師が看護研究に取り組むうえでの困難さから本システムでの寄与が期待される要因を明らかにし、臨床看護師の看護研究支援システムの開発を行った。作成したシステムは臨床看護師に公開し、実施施設で行われている看護研究に対する研修にあわせて、自由に活用してもらった(2019年度～)。

2) 自己学習支援の利用状況についてデータ化し、実際の臨床看護師の看護研究の取り組みに及ぼす効果について縦断的に追跡し、本自己学習支援システムの有効性について評価した。具体的には、研究支援システムの利用状況(ログイン回数、資料の保存のためのアップロード回数、振り返り記録回数)、理解度などに対する自己評価(自己の準備状況、研修の理解度、研修の満足度、研修後の有用感)をデータ化し、その数値について新型コロナウイルス完全感染の前後(感染流行中含む)で比較検討した。

3) システム導入前後の臨床研究の到達度(学術集会エントリー割合)について、システム前後、感染前後での比較検討した。

4) 倫理的配慮 実施施設の倫理委員会の承認を得た。システム使用者にはオプトアウト

にて研究目的、研究内容などを掲示し、各自の研究データを使用しない権利を保障した。

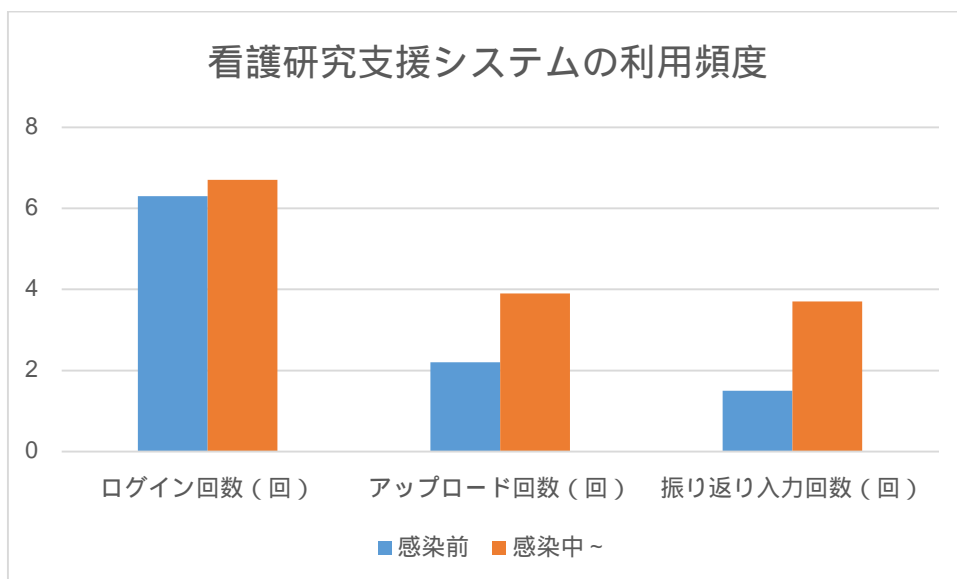
4. 研究成果

利用者は感染前は5グループ9名、感染後は14グループ23名に増加した。

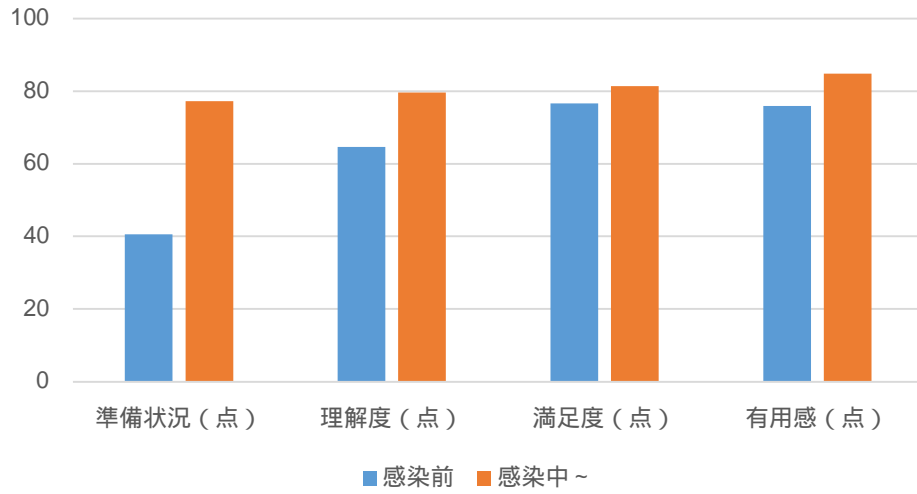
感染前開始前の平均ログイン数の平均は 6.3 ± 7.1 回、アップロード回数は 2.3 ± 0.8 回、振り返り記録回数 1.5 ± 0.0 回であったのに対し、感染中開始後期研修では平均ログイン数の平均 6.9 ± 8.7 回、アップロード回数は 3.9 ± 3.7 回、振り返り記録回数 3.7 ± 2.2 回であった。支援後の理解度などに対する自己評価(100点満点)については、感染前開始で準備 40.6 ± 16.1 点、理解 64.6 ± 9.2 点、満足度 76.6 ± 14.6 点、有用感 75.9 ± 13.7 点、到達度 3.0 ± 5.3 点に対し、感染中開始で準備 77.0 ± 15.0 点、理解 79.6 ± 45.8 点、満足度 81.4 ± 13.9 点、有用感 84.8 ± 16.3 点、到達度 74.4 ± 32.9 点であった。

以上より、研修支援システムは各研究グループが各自の意思で自由に使用するようにしたが、感染前後の比較で活用者が増加した。また、利用状況も増え、自己の看護研究に対する振り返りの回数が増えた。また、対象者の看護研究に対する自己評価は、感染前では約6~7割だった得点が、感染中から感染後では8割に増加した。このことは、研修だけでなく、各自が研修前後で自己学習支援主体的にシステムを活用して主体的に予習、復習に取り組んだことが影響していると考えられる。感染で対面などの研修が制限されたことから、様々な場でのICTの活用が身近になったことも影響していると考えられるが、そのような状況の中で実際に使ってみることで効果を感じてきたことがこの結果に大きく影響していると考えられる。また、この結果についてはシステムへのログインやファイルのアップロードだけでなく、自己の取り組みに対する振り返りの回数も増加したことも影響したと考える。

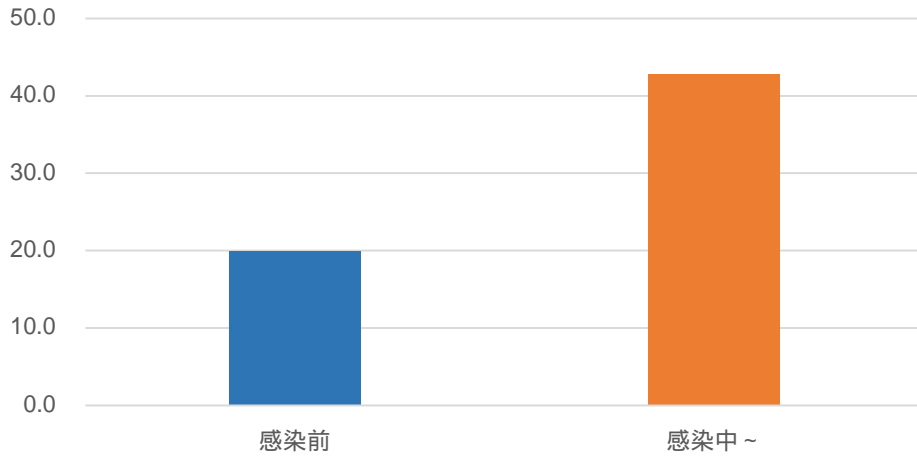
実際、研究の最終的な到達度は、システム導入前では、取り組まれている研究は途中で中断されたりして最後までやり切ることが難しく、院外での発表にはつながりにくかった(0件)。しかし、自己学習支援システム導入後は発表者が現れるようになり(20.0%、1件/5G)。その割合が感染後は大きく増加した(42.9%、6件/14G)。この結果には、看護研究に対する研修の内容も大きく影響していると考えられるが、看護研究は数回の研修だけで成果をあげることが難しく、研修以外での取り組みが重要である。そういう面では、この研究成果は、臨床看護研究に対して本支援システムの有効性を示す1つの根拠にもなりうると考える。



看護研究に対する自己評価（100点満点）



学術集会エントリー率（全国）%



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 片岡竜太, 二瓶裕之, 小原真知子, 原島恵美子, 高松研, 神原正樹, 山元俊憲, 中山 栄純
2. 発表標題 健康長寿社会の実現を目指したICTを活用した授業の成果 - - 保健医療福祉介護栄養6分野2年生のネットグループ学修
3. 学会等名 日本健康教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 片岡竜太, 小原真知子, 原島恵美子, 中山栄純
2. 発表標題 Webシステムを活用した医療系分野連携PBL実施とその成果
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 片岡竜太, 廣井直樹, 山元俊憲, 中山栄純, 小原真知子, 原島恵美子, 二瓶裕之
2. 発表標題 Webシステムを活用した低学年と高学年を対象とした医療系分野連携PBLの成果
3. 学会等名 日本医学教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡山美佐子, 中山栄純
2. 発表標題 中小病院での自由意思に基づく看護研究への取り組みと研究支援体制
3. 学会等名 日本看護学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松下徹, 深沢久美子, 中山栄純
2. 発表標題 ICTを活用した研究支援システム導入の成果
3. 学会等名 日本看護学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 深沢久美子, 松下徹, 中山栄純
2. 発表標題 2年間通した研究支援プログラムの有効性の評価
3. 学会等名 日本看護学会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関